

# 飛騨地域から出土した木製の櫛（くし）について

調査課 三島誠

考古学コラム「きずな」No. 2

平成 25 年 3 月 4 日

岐阜県文化財保護センター

## 櫛の発見

岐阜県高山市の高山盆地北西端では、中部縦貫自動車道の建設が進められています。この事業に伴って発掘調査を行った「与島B地点遺跡」と「野内遺跡C地区」の木製品を整理した際に櫛がみつかりました。

今回は、この櫛に注目したいと思います。

## 櫛の種類

櫛は、乱れた髪を整えるために梳（と）かしたり、飾りとして髪にさしたりする道具です。形状は板状のものが多く、片方に等間隔の歯があります。日本最古の例は、佐賀市「東名（ひがしみょう）遺跡」のもので、縄文時代の早期（約7000年前）のものがみつかりました。

縄文時代の櫛は横幅が狭く、縦に長い堅櫛（たてぐし）です。私たちにも馴染みのある横幅の広い横櫛（たてぐし）は、古墳時代の後期、およそ6・7世紀頃に始まったと考えられています。

## 堅櫛

下の写真は、与島B地点遺跡の溝の下層から出土した堅櫛です。



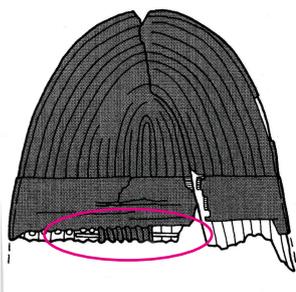
堅櫛の表面



堅櫛の裏面

2つに分かれた状態で出土しましたが、接合することができました。ただし、本来あるべき櫛の歯の部分は残念ながら残っていません。残存したものの大きさですが、長さ3.7cm、幅3.9cm、厚さは0.3mmです。櫛全体には櫛の歯を固めて補強するために黒褐色のものが塗られていました。

詳しく観察してみると、細長い材を束ねてU字状に曲げ、頭部と歯の境を薄い板状の帯で巻いて留められました。束ねられた細長い材は、14本ありました。



頭部で折り曲げられていますので、歯の数は全部で28本になります。さらに横の図の楕円で囲んだ部分には、歯がばらばらにならないように添木を横方向に置いたうえで、歯を糸で縛ったことがわかりました。

この櫛の材質を調べてみると、束ねられた細い材も、帯状の材もタケであることがわかりました。竹を薄く縦に裂いて作られていました。また、黒褐色に塗られているものは、漆であることがわかりました。

漆は、腐りにくく、保存性が高いため、かろうじて頭の部分が残ったのかもしれませんが。

このような方法で作られた櫛は、湾曲結歯式（わんきょくけっしき）と呼ばれ、古墳時代になると盛行します。「与島B地点遺跡」の櫛が出土した溝の下層からは、古墳時代中期の土器が多く出土しました。このことから、この櫛は5世紀頃のものであると考えられます。

飛騨地域では、飛騨市「宮の前遺跡」で縄文時代の堅櫛が出土していますが、古墳時代の堅櫛は、初めての発見例となります。湾曲結歯式堅櫛は古墳に副葬される例が多いことから、飛騨地域の有力者の存在を示す資料といえます。

## 横櫛

下の写真は、「野内遺跡C地区」で出土した横櫛です。



残存した長さが1.5cmと非常に小さいものですが、櫛の歯の一部が残っていたため、櫛とわかりました。

歯は先ほど説明した堅櫛と違い、1枚の板状の材に太めの歯を削りだして作られました。この櫛の材質を調べ

## 横櫛

てみると、イスノキでした。イスノキは馴染みのない木ですが、マンサク科の常緑高木で、乾燥すると非常に硬く、加工するのが難しい木です。

童謡の『こぎつね』の一節に歌われているように、櫛といえば、ツゲの木で作られていると思われがちですが、各地の遺跡で出土した櫛をみると、ツゲだけでなく、イスノキも多く使われていたようです。こうしたことから、写真の木製品は、櫛であると判断することができます。

このような方法で作られた横櫛は、古墳時代後期頃から作られるようです。「野内遺跡C地区」の櫛が出土した場所は、古代の遺物が多く出土しました。このことから、この櫛は、古代以降のものであると考えられます。また、イスノキは、温暖な地域で自生していますが、飛騨地域では自生しないことから、他の地域から製品として持ち込まれたと考えられます。

土の中から出てきた小さな木製品は脆弱（ぜいじゃく）な場合が多いため、壊れないように細心の注意を払い、取り上げ、木製品に付着した土を水できれいに洗い流します。

こうした作業を経ることで、小さな木製品は整理作業の中で詳しく観察をしたり、自然科学的な分析を行うことができるようになり、発掘調査時には気がつかなかったことを、いろいろと語りかけてくれるのです。

## 参考文献

岐阜県文化財保護センター2013『与島B地点遺跡・与島C地点遺跡』

岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡C地区』